

定年座まわり

少少の頃から歌手になりたいがった。

その夢を實現して

歌手としてデビューした。

やと自慢の

名の会者が

自ら

歌って

無名台

に立った。

に震えぞ。

吉川精一



延年座まわり舞台

江苏工业学院图书馆
藏书章

吉川精一

著者紹介（よしかわ・せいいち）

昭和16年1月東京・蒲田生まれ。3歳の時父母の実家のある神奈川県大和市に移住。昭和38年3月早稲田大学文学部卒、NHK入局。アナウンサーとして「昼のプレゼント」「連想ゲーム」「NHKのど自慢」「人生これから」「紅白歌合戦」総合司会、「将棋番組」などを担当する。平成10年1月定年。現在、講演、司会、エッセー執筆、研修講師、ラジオ・パーソナリティーなどで活躍中。同年9月に日本クラウンから「淑子は何処に」のCDを発売、少年期から夢だった演歌歌手デビューを実現。著書に『哀しみは日本人』『言葉づき合いの上手い人、下手な人』など。

ていねん ぎ お たい
定年座まわり舞台

1998年(平成10年)12月14日 第1刷

著 者……^{よしかわせいいち}吉川精一

編集人……田口武雄

発行人……黒埼精三

発行所……読売新聞社

東京都千代田区大手町1-7-1	〒100-8055
大阪市北区野崎町5-9	〒530-8551
北九州市小倉北区明和町1-11	〒802-8571
名古屋市中区栄1-17-6	〒460-8470

印刷・製本……中央精版印刷株式会社

©1998, Seiichi YOSHIKAWA

JASRAC 出9811992-8

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

定年座まわり舞台◎もくじ

さらばNHK〜定年の日〜	7
さらば友よ〜「のど自慢」の思い出〜	24
最後の旅	24
ゲストがくれた花束	37
四つの「囲む会」	48
心に残る人々	52
「瀬戸の花嫁」	61
車いすの青年	64
父の死	81
演歌歌手デビュー〜賽を投げた〜	114
晩夏の宵の熱唱	160
人生これから	174
新しい世界に生かされて	174

人生にへ三つの通りへ	180
手番はどっちだ	186
いい時代	190
鍵山さんのこと	197
さながら孫のように	204
感銘受けた至言	206
新人研修く今日までありがとう	215
新しい仕事のなかで①	222
新しい仕事のなかで②	224
接客の四要点くFALAのテーマ	227
あとかき風に	236

装画 小池邦夫

装丁 重原保男

定年座まわり舞台

さらばNHK〜定年の日〜

五十七歳の誕生日——その日、私は定年になった。人事上は翌一月三十一日付であるが、土曜日なので実際は前日、つまり平成十年一月三十日に、私は三十四年十か月勤めたNHKを卒業した。その日、NHKから受け取った辞令書には、

「定年により退職とする」

とだけ書かれていた。味気ないが、「定年」という二文字が大事で、たとえば依頼の場合はここに「依頼」と記されるにちがいないし、場合によってはただ「解職とする」となるのであろう。わずかに二文字だが、それなりに重い。

その前日、つまり一月二十九日の夜を、私は家内と共に箱根で過ごした。自動車用品の販売で

知られる株式会社イエローハットの鍵山秀三郎社長（現相談役）のご好意でご招待をいただいたのである。箱根湯本駅からさほど遠くない、そこはイエローハットの社員のための保養所であった。もちろん温泉風呂もある。以前から一度ぜひといわれていたのだが、なかなか実現できず、結局〈定年前夜〉に願いがなかったのだ。

夕方五時過ぎに保養所に到着、ただちに岩風呂に入れていただき六時半から会食。かねてより見知ったイエローハットの社員の方も三人付き合って下さった。恐縮である。

鍵山社長は、いつものようにただにこにこされて、何もおっしゃらなかった。私の定年のこと、その後のことも、多分ご存じであつたにちがいない明日の誕生日のことも。気づかないのではない。気づかないから触れないのではない。気づいているから、それも十二分に気がついてゐるから触れないのだ。気働きとは多分、こういうことなのにちがいないと確信するほどの〈無〉のとき気働きのなかで、会食もその後の酒席も和やかなうちに過ぎた。くわしいことは何も決まっていなしいし、決められてもいない。ただ新しい年度の四月から、何か研修的な仕事でお世話になるのだが、そのことにもまるで言及せずに、早春にはいささか早い箱根の宿での一夜の談笑の時間が流れた。

ありがたい時を味わいながら、私は明日の定年の日のあいさつのことを心の隅で考えたりしていた。恒例のことだが、定年の日のお昼時、正午のニュースが終わった零時二十分から、アナウンス室でセレモニーがある。室長がねぎらいの言葉を述べ、その日の主人公と親しかった後輩が

送る言葉、その後に主人公がお礼の言葉を発するというものだ。

何をどう話そうか、いつも気になっていた。とりわけ年が明けて、その日が秒読み段階になると、毎日一回は「さて何を、どう話す？」と考えた。考えたといっても、ふと考える程度のことなので、まとまったことにはならない。したがってその都度いい加減のままとなる。だからその前夜になっても決めかねていた。しかし、おぼろげながら話の中身が見えはじめてはいた。なんだかへ人生っていうやつは皮肉に満ちているし、だからこそ面白いのではないかと思いはじめていた。そのあたりのことが話せればいいのかと思うようになっていた。あとはその時のこと、なんとかなるだろう。だいいち、もう「評価」の対象外の人間となるのだから――。そんなことを思い巡らしながら定年前夜を過ごした。

その日、もう一つ私の気持ちのなかに、ちょっとした気がかりと充足感があつた。

将棋の第四十七期王将戦の第二局が箱根で行われていた。羽生善治王将に佐藤康光八段が挑戦しているものだ。気がかりというのは、その夜に決まる第二局の結果であり、充足感というのは、私にとって二度とない定年前夜を過ごす同じ箱根に今、羽生さんも佐藤さんもいるのだという思いだ。二月以降も将棋の仕事を担当したいと念じているものの、はっきりとした約束をもらっているわけではない。もしかしたら、もう将棋の仕事とは縁がなくなるのかもしれない。そうなれば、めったに棋士の方々と会うこともなくなるにちがいない。だから、不思議なことに、将棋がひどく懐かしく、いとおしいものに感じられたのだ。

翌一月三十日の朝。いったん大和（やまと神奈川県大和市）の自宅に戻り、着替えてから最後の出勤、十一時過ぎに行けばいいことになっていた。

五時半に起床。朝風呂を浴び、七時に朝食。七時二十分、鍵山社長のお見送りをいただき保養所を出発。七時四十一分箱根湯本発の小田急線で小田原まで、そこで八時八分発の特急ロマンスカーに乗り町田まで。町田には八時五十一分に着いた。その間わずか一時間半足らずだが、私にはとても長旅をしたような、奇妙な時間の流れのように思えてならなかった。多分それは、サラリーマンという「日常」から定年後という「日常」へのいわば空白の一瞬とでもいえる「非日常」のなかに身を置き、時間を過ごしているからだ。いったん帰宅し、いつもの通勤電車に乗り換えてしまえば、それがたとえ最後の日とはいえ再び「日常」に還り、ただ日付が変わるだけの、その後の「日常」へとつながっていつてしまうことになる。箱根湯本から町田までの「常とは違う電車」に身を任せながら、これまでの「日常」と新たな「日常」との間にかの間に現出した「非日常」に、私は奇妙なとしかいいようのない感慨を味わっていたのだ。

そして私の予感したとおり、町田から小田急江ノ島線に乗り換えて桜ヶ丘駅で降り、それから十分の後に自宅へ戻った瞬間から、通勤生活という日常感覚に浸された。あわただしく着替え、家内の「行ってらっしゃい」に送られて一歩出ると、もう私はサラリーマンになっていた。私にとっては「最後のサラリーマン」に。桜ヶ丘駅の売店でスポーツ新聞を買ってみると、将棋の王将戦は羽生さんが勝っていた。

結局、私はあいさつで「三つの皮肉」^{アイロニー}について語った。語ったというより自問自答したといったところだったろうか。

私が話す前に、室長が私の三十四年十か月の「業績」について役目柄語ってくれた。これまでの主な担当番組は「昼のプレゼント」「連想ゲーム」、それに「NHKのど自慢」「紅白歌合戦」の二度の総合司会など。もとより業績などといえるものはないが、改めて紹介を受けてみると「ああ、ずいぶんいい場面を与えてくれたのだ」と他人事のように思った。ありがたいなと思いつつ、しかし、いずれも過去のことだとも思った。大事なことはへいま、ここから、さてお前、いったいどうするのだ。

つづいて後輩の葛西聖司君が「送ることば」を語ってくれた。「昼のプレゼント」司会時代も「のど自慢」司会時代も、私はすべての出演者（プロ）から記念のサインを書いてもらっていた。そのことをいつか葛西君に話したことがあるのだろうか、彼は「サイン帖」について触れてくれた。しかも「サインのかたわらに克明なメモを記して後の参考資料にしている」と。だが、これは褒めすぎ、評価のしすぎだ。私は単純に「サイン集め」をしていたにすぎないのだ。

「しっかりとした資料にすればよかった」と、私は葛西君の話を聞きながら、しきりに思った。そして私の番。

「きのうのホームランで今日の試合は勝てない」

こう私は切り出した。この言葉は政治評論家の早坂茂三さんの著書のなかに「ベールブルースの言葉」として引用されていた文句で、読了したばかりの印象深い一節であった。だから室長の言葉を聞きながら、「昼のプレゼント」も「連想ゲーム」も「NHKのど自慢」も、いずれもへきのうの出来事」だと思った。だからそのことから話し始めてみようと瞬間思ったのだ。そして続けた。

「——と、これはベールブルースの言葉だそうですが、そして私はこれまで一本として、アナウンサーとしてのホームランを打ったことはないのですが、室長のお話を伺いながら、私もそんなふうに思えてなりませんでした」

確かに私はこれまでホームランなど一本も打っていない。打てなかった。せいぜいテキサスヒット程度。一塁に出るのが精いっぱい。タイムリーヒットも一本もなしといったところだ。業績というより事実として紹介された「昼のプレゼント」「連想ゲーム」「NHKのど自慢」などの司会は、かろうじてテキサス性ヒットであったかもしれない。しかし、そうだとしてもへきのうのことであることに変わりはない。繰り返すが、大事なことはへいまから、ここから、つまり「定年後」だ。〈NHKアナウンサー人生〉は一応終わるが、アナウンサー人生そのものが終わるわけでもなく、ましてや〈私の人生〉が終了してしまうわけではない。今ここから始まる私の人生——こそ。

「私は今、三つの人生の皮肉を実感しています」と、私はいささか飛躍しすぎだなと思いつつ、

話を展開していった。

一つ目の皮肉。

昭和三十七年の秋。私はディレクター志望でNHKの入社試験を受けた。筆記試験のちょうど一週間前に電報が来た。その当時、わが家にはまだ電話というものがなかった。

「音声テストを受けよ！」というのである。ディレクター志望になぜ音声テストを、と思ったが、いわれるままに出かけた。テストの中身は、短文を読んだり、漢字を読んだり、一枚写真を見ての説明か実況かをしたりという課題であった。私は張り切って読んだ。その時から、どうも本番に張り切りすぎるといのが私の欠点のようであったが、音声テストの時はそれが「幸い」したのであろう。漢字の読み方もほとんどできたが「磊落」という文字だけが読めなかった。そのせいでか、その後今日に至るまで、私は一度として「豪放磊落」であつたためしがない。どうも「磊落」は苦手だ。

写真は何枚か用意されていた。私はそのうちの一枚、スポーツのアジア大会入場行進の写真を見ながら、当時ジャーナルな視点であつた「政治とスポーツ」の矛盾の話を説明してみた。

心地よい緊張感のうちに音声テストは終わった。しかし、なんのためのテストであるのかは皆目見当もつかなかった。一週間後に筆記試験が実施された。試験会場は母校の早稲田大学であつた。なじみの場所で落ち着けたが、受験生の多いのにはいささかびっくりした。

「これは無理だな」と思った。みんな私より「できる奴」に見えたし、スマートに見えた。試験

もむずかしかった。「ますます無理だ」と確信(?)した。

そして一週間。当時NHKは内幸町にあった。その会館の、多分ホールか何かの壁面に模造紙がはられていて、そこに第一次試験の合格者が発表されていた。

ディレクター志望は〈放送要員〉の枠内にくくられていた。だから〈放送要員〉の欄を見た。しかも道一つ隔ててこちら側から見たのである。自信がなかったからだ。いきなり近寄って、もしなかったらショックが大きかったのだ。勇気もなかったのだ。

296番——それが私の受験番号だ。道一つこちら側から、多分道幅が十メートルほどあったように思うので、ホールの壁までは十二、三メートルの距離はあったろう。私は目をこらした。

〈放送要員〉296番。

なかった。前後二十番ほど飛んだ数字が見えただけであった。

「やはりだめだったか」と私は思った。一瞬、おやじとおふくろの顔が浮かんた。口にこそ出さなかったが、私の「NHK入り」を望んでいるふうに思えたからだ。

しかたがない。ほかの会社を頑張ってみるしかない。私は「電通」「講談社」「毎日新聞社」の学校推薦をもらっていた。推薦というのは一応の受験資格ということなのだが、それでも成績表の「優」の数がどうか「良」はいくつまでとか、今思えば、根拠があるようでないかもしれない「うわさ」に一喜一憂しながらの入社戦争を闘っていた。合格する保証など全くないが、ともかく次のチャンスだけはあった。